

# アングル

## 愛媛を 地域スポーツ立県に

スポーツジャーナリスト  
二宮 清純

### 基本法成立が追い風

2011年に制定されたスポーツ基本法は「スポーツは、世界共通の人類の文化である」との書き出しから始まる。そして、「スポーツは、人と人との交流及び地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生に寄与するものである」と記載されている。

第21条では、国及び地方公共団体は地域スポーツクラブなどが実施するスポーツの振興事業への支援を行うことが基本的施策として規定された。この法律により、スポーツは地域のコミュニティ形成、世代間交流に貢



献するものであり、国や地方公共団体はその活動をサポートする必要があると明確に定められたのだ。

これは地域スポーツにとっても、追い風である。実際、12年度は、文部科学省のスポーツ関連予算は過去最高の237億9300万円を計上した。国家財政が逼迫する中、前年比で約10億円もアップしている。

もちろん今後も基本法の理念が実際の政策に反映されなければ、すべては絵に描いたモチに終わる。現場レベルでいかに有効な施策を打ち出していくか。「机上の空論」ではなく、「地上の正論」に昇華させる努力が引き続き求められることは言うまでもない。

### フランスの3世代ラグビー

地域とスポーツの関わりにおいて私には忘れられない光景がある。98年夏、サッカーW杯フランス大会の取材で現地を訪れた時

スポーツ基本法では、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」と、「スポーツ権」が明記された。

のことだ。ノルマンディーに住んでいたときにラグビーの試合観戦を誘われた。フランスのラグビーだから、さぞかしレベルの高いゲームが観られるだろうと楽しみにしながら小さな村の試合会場に向かった。

ところが実際に行ってみると、雰囲気が少し違っていった。目の前では10代の子どもから70代の高齢者までが一緒にひとつのボールを追いかけていたのだ。出場選手の合計年齢がだいたい500歳になるようにルールを決め、地区ごとのクラブで対抗戦を行っていた。



ひとりはおんなのために、おんなはひとりのために——  
スポーツは個性の尊重や、助け合いの精神を学ぶ機会にもなる。

試合の様子に目を凝らすと、おもしろいことに気がついた。子どもがボールを持つと、まずはどンドン走らせる。しかし、トライの寸前まで来た瞬間、彼らの親世代のラガーマンがパッとタックルをしかける。まるで「世の中、そんなに甘くないぞ」と言わんばかりのプレーをみせるのだ。



愛媛FCのホームゲームではスタジアム周辺に飲食ブースやマスコットが登場し、まさに縁日のような雰囲気がある。

逆に高齢者がボールを持つと、周囲はやさしく包み込むようにタックルする。相手がケガをしないよう、互いを尊重し、いたわりながらゲームを進める光景はとても印象的だった。

さらに盛り上がるのは試合後の打ち上げだ。「うちの孫はさすがだ。ひ弱だと思っていたけど、ワシの血をひいているだけのことはある」

そうワイン片手におじいちゃんが孫の自慢をすれば、「うちのおじいちゃんは腰が曲がりかけているけど、タックルしても倒れない。かつこ良かった」と、孫もおじいちゃんの偉大さに気づく。こうしてボールひとつで3世代の絆が自然と深まっていくのだ。

果たして日本で、このような風景が日常

## スポーツは「祭り」

的に見られるだろうか。以前に比べれば、地域スポーツクラブの活動は活発になっているものの、まだ子ども同士、大人同士で世代ごとに行うスタイルが主流だろう。ただでさえ少子高齢化が進み、世代間の断絶が広がっていく中、スポーツはその橋渡し役となりうる可能性を秘めているのである。

スポーツというと、体を動かす「運動」とイコールに結びつける方が少なくない。私が全国各地を講演や取材で訪れると、

「僕は体を動かすことが嫌いだから、スポーツとは接点がない」

「もう高齢で体が思うように動かない。今更スポーツなんて……」

といった声をよく耳にする。

しかし、スポーツの語源で最も有力なものはラテン語の「deportare」だと言われている。

「portare」とは運ぶこと。すなわち「仕事」である。その否定形（de）だから「仕事をしない」。つまり「遊び」や「解放」という広い意味なのだ。

私は、スポーツを一種の「祭り」だと考えている。日本には昔から各地域において祭りの文化があった。祭りは全員参加のイベントだ。老若男女が、それぞれの役割を果たしながら、祭りをつくりあげていく。神輿を担ぐ人は若い人であっても、法被を縫うのはおばあさん、料理をつくるのはお母さんといった具合だ。皆が祭りに向かって一致結束することでエネルギーが生まれ、地域が活気づく。

スポーツとの関わり方も、ただ体を動かしたり、試合に出場するだけではない。会場に行き、応援するののひとつの方法だし、選手のために食事を提供したり、差し入れをしたり、金銭的な援助をするのも立派なスポーツへの参加だ。愛媛でも過疎化が進み、地域の伝統が継承されず、祭りが廃れているとの話を見聞きする。ならばスポーツを新たな「祭り」として地域の拠り所のひとつとすることも活性化の有効な手段ではないだろうか。

## クラブとチームの違い

地域スポーツクラブを、いわば地域のお祭り集団と考えれば、多くの住民にとって決して縁遠いものではなくなる。そもそも、なぜ地域スポーツクラブのことを、地域スポーツ「チーム」とは呼ばないのか。言葉遊びのように思われるかもしれないが、ここにも重大な意味が隠されている。

チームは基本的に、ある目標を達成するために集まった集団である。つまり目的を達成すれば解散してもよい。たとえば五輪やW杯の代表チーム。これらは大会が終われ

ば、ミッションを遂行できたかどうかは別にしても、「チーム」としての活動は「いったん終了する」。

一方、クラブは原則として解散しない。たとえば、愛媛FCなどのJリーグのクラブは一部の例外を除いて、創設当初から数を増やし、各地域に根付いてきた。クラブは、いわば家族と同様、永続する組織なのだ。そして、自分たちの地域のクラブを文字通り支援するのが、「サポーター」である。チームを応援する一過性の「ファン」とは異なり、クラブを支えるサポーターが支持クラブを変えることは基本的にはない。

日本もJリーグが誕生して20年を迎え、地域に根ざしたスポーツクラブという発想はだいぶ浸透してきた。だが、クラブを通じて地域社会のよりよい発展を目指す上では、そろそろ次の段階に入っていく必要がある。地域住民や企業がお金を出し合い、クラブづくり「コミットメント」するのだ。単なる「サポーター」ではなく、活動資金などを供給する代わりに、クラブ運営へ意見も出せば、施設も使う。クラブの構成メンバー、つまり「家族」を増やすことが一家繁栄には不可欠である。



今季9年目を迎える四国アイランドリーグでは、選手たちが野球の合間を縫って地元のイベントなどへ積極的に参加している。

**国体成功にも不可欠**

幸いなことに愛媛にはサッカーJ2の愛媛FC、野球独立リーグの愛媛マンダリンパイレーツと地域に密着した活動を続けているクラブがある。そして、今回の特集でも紹介されているように、各地域でスポーツを通じた町づくり、人づくりに尽力しているクラブが数多く存在する。

こういったクラブが互いに協力し合い、成功のノウハウを共有することで、さらにスポーツ振興の輪は広がっていく。その輪が幾重にも重なれば、人々のつながりも深まり、また新たな発想も生まれる。このサイクルを好循環させることが、ひいては地域を元気にすることにもつながるはずだ。愛媛県では4年後に「愛顔えがほつなぐえひめ国体」が開催される。国体という大きな「祭り」を、県民総出で成功させる上でも、地域スポーツの充実が欠かせない。愛媛は日本一の地域スポーツ立県を目指す——。このくらいの意気込みがあつていいと、個人的には考える。

## 【プロフィール】

1960年、愛媛県生まれ。フリーのスポーツジャーナリストとして国内外で取材、執筆活動を展開。主な著書に『スポーツ名勝負物語』『プロ野球の一流たち』『天才たちのプロ野球』（講談社）、『勝者の思考法』（PHP新書）、『プロ野球の職人たち』（光文社新書）など多数。最新刊は『プロ野球「衝撃の昭和史」』（文春新書）。

HP「SPORTS COMMUNICATIONS」 <http://www.ninomiyasports.com/>  
 スマートフォン用「ニノスポ」 <http://ninospo.com/>  
 携帯用「二宮清純.com」 <http://ninomiyaseijun.com>

